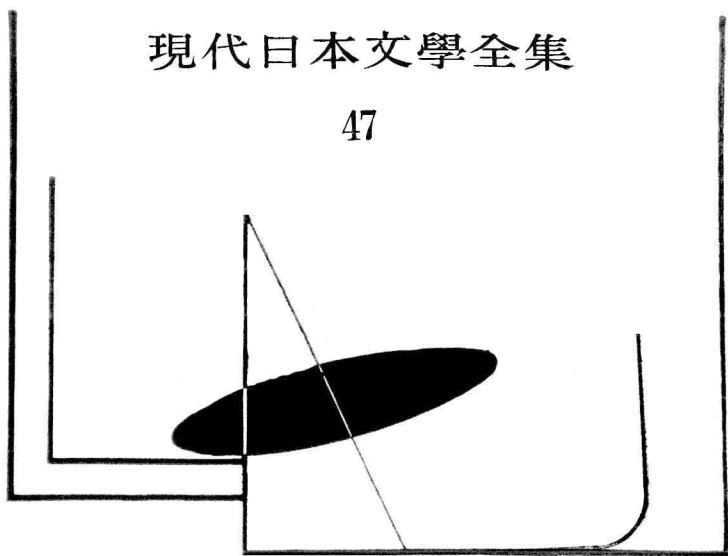


雄一 文聖 羽橋 丹舟
集

現代日本文學全集

47



筑摩書房版

丹羽文雄
舟橋聖一集

昭和二十九年十一月十五日 印刷
昭和二十九年十一月二十日 發行

著者

丹羽文雄
舟橋聖一

發行者

東京都文京區台町九
古田晁

印刷者

東京都文京區改代町二三
多田基

發行所

東京都文京區台町九
筑摩書房

電話小石川 (92) 五一・七〇〇
編輯部 二〇〇五七

振替 東京 一六五七六八

印刷 株式會社 精興社
製本 多田印刷株式會社
紙張 三愛製紙株式會社
本文紙 日本クロース工業株式會社

丹羽文雄集 目次

鮎 五

贅 肉 一二

愛慾の位置 二六

厭がらせの年齢 三九

爬蟲類 五七

遮斷機 一七七

柔媚の人 二六六

舟橋聖一集 目次

ダイヴィング 二五一

木 石 二六九

川 音 二六三

りつ女年譜 二六八

篠 笛 二九八

鷺 毛 三〇五

裾 野 三三四

丹羽文雄（龜井勝一郎） 四〇五

舟橋聖一（阿部知二） 四一四

解 説 四一八

年 譜 四二三

装 幀 恩地孝四郎

丹羽文雄集

信
止

丹
月
文
廣
乙

鮎

海棠と夕顔に雨がふつてゐた。傳屋が母の和緒の手紙をもつてきたので、津田は朝からの荷立つしよぎいなさを吹きとばす氣で家を出た。電報で東京から呼びよせられて來たが、肝心の和緒がうちを開けはなして何處かに姿をかくしてゐた。大變間尺にはあはない昨日來であつた。

長良川が軒下にながれてゐる或料亭のはなれに和緒はゐた。津田が熊笹の庭を渡つていくと、和緒は障子をあけた。いつものやうに陽氣なほほ笑みだつたが、どこかに元氣がない。元氣がないと、少しぐいと來るものを感じて津田は目を大きくした。それで母と子の挨拶になつた。「朝はね、もう少しのところで守山と喧嘩するんでしたよ」

笑ひながら、しかしその語氣は刺刺しかつた。刺があるので、まだ朝の餘憤がのこつてゐ、自分はまだ慍つてゐるのだといふ氣が津田はした。一籍をね、わたしの籍を守山が、守山家へいれてほしいと言ひだしたんだよ」「結構ぢやありませんか」なんだそんなことか

と安心するものがあつたが、それはそのまま押し殺して、「電報はそのことですか」かう言つたとき津田は、まるで慍つたやうによつきら棒であつた。内心、これは本當に結構なことではないか、と座布團にをさまつた。

が、和緒にしてみると心外だつた。自分の考へに味方をし、力づけ、助けになつてくれるであらうと津田を頼みにこそすれ、まさかかうはつきり逆らひはすまいと當てにしてゐた思惑がいつべんに叩かれて、もう胸いつばいになつて來る顔を暫く津田の前におつとさせ、それから言つた。

「いやだよ。いやだよ。誰がなんと言はうと籍は移してやらないから」

唇を歪め、泣きだしさうな瞬きを二つ三つする。張りのあるその眸に力を籠める風だつた。さうでもしなければ、和緒は津田に言ひ負かされる怖れがある。津田は和緒のそばにうつちやられた「主婦の友」と、映畫と演藝の極彩色をちよつと眩しさうに眺めやつた。

「誰がいま更入籍なんて素直にうけてやるものかね。さうだらう。守山も考へなほして見るがいいんだよ」と和緒は少しこはい顔ををした。

津田は自分が叱られに來たやうな氣持であつた。

「何と言はれようとしちややらないよ。斷るんだよ。きつぱりと斷るんだよ。わたしはここを一步も離れやしない。え、動いてやるものか」この春、守山から津田のところへ、和緒に

い縁談の話があるがどうだといふ風な手紙がきた。津田はかうした問題になれてゐないので、どうしてよいか途方に窮した。投出した氣でつい返事を出し遅れてしまふと、今度は和緒から守山が何を言つてきても返事をしてはいけなと手紙が來た。それで安心して捨て置いてない。守山はいま經濟的行詰つてゐるから自分との關係をきりがつてゐる、が今きられてはこちらが困る、もう少ししたれば暮しの方法が立てられるからといふ母の文面だつた。和緒は池の坊の師匠の腕をもち、裏千家のこれも教へられるだけの素養がある。現に四五人の娘に教へてゐる。その方面で成算が立つのであらう。

津田はこれで十數年來、和緒と妙な境遇にゐる。當時やつと小學校に通ひはじめた津田をのこして、和緒はある旅役者を追つた。その後、一の宮、名古屋、加納を轉轉として、守山の世話をうけ岐阜に落着いてから數年にならうとする。和緒はまだ四十二歳、津田は十七の時のひとり子である。津田は小さいときから母のない人生に慣らされてゐるので、母をさほど必要にしまなかつた。一年にこの母と子は五六度逢ふ。まぢがつても和緒は自分の生活を津田に話さない。話されないから津田も持前のひねくれた氣遣ひで、よしその氣ならと非人情に、だから津田の態度は母の日陰ものを認め、安んじてゐるかのやうな形であつた。安んじて——この言葉には文句はあるが、肯定してもいい津田の氣であつた。

そこへ、守山の細君が亡くなった。すると如何にもその時を待つてゐたといふ風に、守山が籍云をもち出した。

和緒は津田に言ふのである。

「この春のことをあの人も思ひ返すがいさね。どの顔さげて、と言ひたいところぢやないか。

守山つたらね、信太郎、奥さんがもう駄目だと言はれるやうになつてから、急に様子が熱くなつて来て、しつこいたらありやしないの。えけつない位、てれくさいつたらなかつたよ。本當にわたしはもてあましたよ。まるで獸みたいに、夜も晝もみさかひがつかないので、女中の手前、出入りする娘さんの手前、わたしは何度赧い顔をしたことだらう。恥づかしいつたら、男も年をとると、することなすことが露骨で、脂つくくつてね」

若し世間の健全な人人がかうした言葉を生みの母の口から聽かされる場合、聴手はいつたいどんな顔をして聞くべきものか、と津田は考へた。するとこつんと来るものがあつた。津田は苦笑でこまかした。

先づ、守山と言ふ人間は――

「わしは氣が短い。いつもあとで後悔してゐるほど氣が短いんだよ。かつとなつと、何をしかすか判らない。時どきそんな自分が怖ろしくなる。だから若しお前がわたしを裏切らうものなら、わしはきつと骨身に應へるほどお前に思ひ知らしてやるだらう。何も今更信太郎さんの意見をきくまでもないんだから。さうだ、わし

の顔に泥を塗るやうな眞似をしたら殺しかねないよ」

と言つてのける性格なので、和緒はすつかり震ひあがつたのである。全く殺しかねない守山であつた。

だから、早速和緒は逃げだした。發見されたら殺される氣で、かくれた。そして津田に電報をうつた。

津田が和緒の家についたとき、雨がふつてゐた。守山が疲れた人のやうに、雨の脚を眺めて頭張つてゐた。津田が挨拶すると、

「あまり和緒を唆かさないうでほしいよ」と頭からだつた。

守山にしてみると、説明の煩瑣をはぶいた譯である。が津田はなにも母から今度の報告をうけてゐない。母の留守にも深い理由を嗅ぎだせないのである。津田は靜かに、どうして自分がそんな悪者であるやうな言ひ懸りをされなければならぬのかを訊ねた。

「困るな。こんな場合に白らつばくれて、お互の氣持を悪くするだけだからね」

津田は重ねて果然とした。

「まあ三人で逢ひ、ゆつくり相談するより仕方がないよ。この場合肝心の和緒がゐなくては始まらないよ。あんただけでは心細い問題だからね」

語尾を苦笑に収められた瞬間、津田はぐつと怵へる氣持でいつぱいだつた。が僅かに、和緒の五年間の生活を思ひ返し、蒼くなるだけで済

んだ。津田は平常、自分でも十分氣がながいとは言へないからである。

母親は言ふ。

「それで、お前はどつちと思ひだいい。やつぱりわたしは守山へ入籍するのが本當なのかしら。あそこを死場所と定めて、生涯をきめてかかるのが本當なのかしらね」

やるせない表情をする母を眺めて、このときの津田は少しほかごとを考へてゐた。津田は母の十七の子供であることを思ひ出してゐる。まるで姉弟だ。人一倍大きな自分に小柄な和緒は姉の形である。かつて母と子は柳ヶ瀬を歩き、和緒が若い男と一緒にたつと噂を時いて守山をやきもきさせ、それをしんから和緒は可笑しがつたが、津田はそれだけではすまされない苦い水を感じた。母と子の差別の具體化だ。津田はいつも十七からの母の役割を氣の毒に思つてゐる。津田は小さなころよく泣いた。泣いて泣きやまないと、どうしてあやしてよいものか、心細くなつて十七の母は、津田を膝にのせてあんと一緒に泣きだしたものである。すると姉は、先づ小さな母親からあやしにかからねばならなかつた。

津田は應へる。

「かうした問題は一時的感情できめるのは危険ですよ。守山の人格は第二のことです。將來のどうせ母さんと一緒になれない僕たちの世間もよく考へて、母さんの老後の安定と言ふ物質的な立場から、いくら狭くこの問題は極める

おいでだらう。さあ、はつきりと言つてごらん。母さんの口からこんなことまで喋らせて、さあ、言つてごらん。はつきりと應へてごらん。人を虐めるにも程があるよ。ひとが落目になつてゐるのをつけこんで、ええ、口惜しいよ。口惜しいよ」

津田は、がんとうちのめされた。母に對するこれまでのいろんな氣持の痛手や、淋しさやるせなさがいつべんに蘇つてきた。ひねくれた持前の虚弱さが、洗ひたてられたやうな氣がした。吊しあがつた可愛い眼もから、泪が堰を切りぼろぼろと落ちて來た。泣いてゐる母はまるで子供だ。そんな子供供した母が、津田は譚もなく好きになるのだが。

その時である。庭石をこちらへ近づいて來る誰かの足音がした。津田は母の手をとると、

「さあ、早く顔をふきなさい。ここはうちぢやありませんよ。ほら、誰か來たぢやないの」

しかし和緒は濡れたままの顔を、やがて開くだらう障子の方へぼんやりと向けてゐた。黙つて顔を見せたのは女中だった。

「遅くなつてすみません」さう言つて女中はすぐこの場の變な空氣を嗅ぎつけたやうに、

「あとはずく只今」早急に引退つていつた。

鮎の魚田である。盥洗の水が場所ちがひのやうに揺れてゐた。途中にはいられて、津田はやれやれと思ふのである。が、

「お前はいつもわたしを黙つて眺めてゐたね。それが怖かつたよ。何よりも怖かつたよ」

「さうですか」と津田はちよつと目のやり場を探した。「母さんの心に、そんな考があらうとは考へてもみなかつたのです。淺薄でした。今まであまり子供らしくなく、非人情ぶつて生意氣でした。これからは決して母さんを虐めませんよ。何とかいい方へ向けませう。これからはよく、大いに努力しますよ」

誇張したものの言ひ方も、仕舞ひには實感をもつて來、津田は晴々しい氣になつた。

「さあ、お飲みよ」

酒は富久娘、生一本、母のお酌で盃をあげた。「誰だつてわたしのやうな運命を望みはしないよ。でも、一度足の向き方がまちがつてしまふと、容易に眞直にはもどつてくれないのだよ。氣ばかり焦つてね。もつとも女のひとりぐらしがどういふものか位、お前にはよく判つてゐるだらうけど」

「判りますよ。しかしその判り方が、母さんの思ひ通りの判り方でなかつたからつて、判つてない譯ぢやありませんよ。母さんの不満はこの判るといふことの客觀的なと、主觀的なとの相違にあつたやうな氣がするんだけど」

饅臺の端が氣短かにちよつと鳴つて、母は再びこはい顔をした。

「もつと身入れて」

「はい」と應へた津田は、「入れてますよ。親のことぢやありませんか」と笑つた。

「それでめて籍を入れろとお言ひかい」和緒の口調は鐵のやうに固く、冷やかであつた。

た。津田はたうとうしてやられたやうな氣がした。が刺を覺えない氣持で、また何事も逆らふまいと思つた。この母には賛成だけが必要なのである。津田は言つた。

「守山のことは、何とか解決しますよ。併し、手切れにどうのとか言ひ出しては厭ですよ」

「誰がお前そんなこと言ふものかね」

猫を眺めやつて、ふと守山は可成り大きな體格だつたつけないと津田は思つた。

「いざとなれば何もかも守山にくれてやる覺悟はないと駄目ですよ」さう言つて嚴格な顔をした。

「あの人のものは五六本の軸とそのほか骨董物が少あつたかしら。それだけだよ」

そんな話の種類より、この場合津田は魚田をついてゐる方が遙に氣が樂な譯だつたが。津田は守山を描いた。交渉を引受けたものの自信がない。氣になつた。

「勿論、今後絶対にこれまでのやうな生活は絶つていただけるでせう。焼棒杭にまた火がついちまつたなんて、厭ですよ」

さう言つて津田はこれは厭な言ひ方だと報くなつた。熱い氣がした。素直に自分の言葉に頷く母を眺めて、もう一度報くなつた。

「わたしも、もういいおばあさんだからね」

その四十二歳を、本當に津田は信じかねるのである。更に本能の過失を重ねるだらう和緒を、和緒自身より津田の方が慥かに豫言出來るからである。この春の出來事がそれだ。體よく捨て

られようとして、またうやむやにもとへ戻つて、その後母は別れようとしなかつた。母が弱いか守山が烈しすぎるのか、そのどちらでもあらうと考へる津田の目につる平常の和緒は、若くて、あまりに端麗すぎる。津田は和緒が、問母と子の生活をもたないで來たその所爲か、和緒を母として見るよりも、とき時、ひとりの女として眺めてゐる。不埒な息子だ。津田は母の美貌を恨むなど、そんな芝居氣は持たない。むしろいつまでも、若く美しくあつてほしいと望んでゐる。並んで立つと漸く自分の肩に髷のとどく、關西風な大きな、豊かな前髪。黒く大きな瞳。鋭い日本人はなれした横顔。小肥りに皮膚がすんで青味をもつ肌。自分を打つときのいつそう煽情的な母親。全身で毬のやうに武者ぶりついてくる血の氣の多い母。感染しやすい快活さと移り氣でむづついてゐさうな、婀娜な母。それ故に、久振りに逢ふ津田は、母をそつと味つてゐるやうな風があつた。

當分は、池の坊と裏千家で生活の道はつづけられていくだらう。が四十二歳が、いづれ第二の守山を作るのである。寧ろ作らない方が嘘だと津田は考へる。津田はかうした考へ方を恥ぢるまいと、己に言ひきかせ、それで承知する自分の氣であつた。一年に五六回、逢つたときだけが母である。餘日の母は、女としての組の方へ入れて置きたい。が、かう考へるのも永年の別別の生活の故だらうと、考へて佳しく、何ともいたし方のなさで、棚のものはやはり棚の上

へといふ風にかたづけて、津田は大して良心の咎も感じないのである。

長良橋を津田がかへるとき、金華城上の月は高くて、あくまで明るかつた。

二

二十代の自分が親の痴情をさばかねばならぬなど、不幸なことだと、苦味とやるせなさを何時幾度逢はうと、もの別れになる守山との交渉のあとさきに味はされて、五日目だつた。

津田は法善寺の朝の梵鐘を聞きに出かけた。守山の目をこまかすために三日置いて、晝近く歸つて來ると、隠家に居る筈の和緒が先づ津田を迎へた。

「あの人が自殺したんだよ」

えつ、と言ふほどの愕きである。

「わたしの居所が分らないので、あの人は毎日わたしを探してまはつたんだつてさ。名古屋へも四日市へも、一の宮へも、自分で出かけるといふ熱心さで、それでもたうとう判らないとなつて、朝からむちやくちやにお酒を飲んで、よつばらつたそのあげく猫いらずを二十瓦呑んでしまつたんだよ。胃袋をさつそく洗滌したんだけど、二日間お腹にあるものがお酒ばかりで、心臓麻痺をおこして昨日たうとう死んぢまつたんだよ」

自殺がびんと來ないのである。嘘のやうだと考へた時、津田は母の顔をぼんやり眺めてゐた。普段着と着換へて、再び和緒とむかひ合つた

時、津田の心のなかにしのびやかに昂奮してゐるものがあつた。

「お葬式は？」

「今日の午後二時と聞いてゐるんだけど」

「當分、うちを出ないやうにして下さい」

顔くつを見、津田は急激にくる息切れやうのものがあつた。自分の頬の冷たさを感じた。

「燈臺もと暗しつて、よく言つたものだね。あそこゐたのにたうとう判らず終ひだつた。そのくせ、あの人は二三度あそこへもやつて來てゐてね。見つかつたらきつと殺されてゐたよ。捉へられてごらん、猫いらずの半分は大丈夫飲まされたに違ひないよ」

津田は、そんな母の顔を見るにしのびなかつた。津田は死といふ重い事實をいくとほりに考へ直しても、素直にその言葉の持つ實感が得られないのだ。どこやらにうしろめたい感じが残る。まるで我がことのやうに氣恥づかしいのである。また母に對しても、何故自分が氣まりの悪い思ひをしなければならぬのか、妙な氣だつた。和緒は落着いてゐる。和緒は少くも自分がことの焦點に置かれてゐるといふことを氣にかけてゐない風である。粧つた無神經なのか、津田には判らない。が一應は、その平靜を認めねばならないほどの靜かさであつた。

この母は、守山の死を啜つてゐるかも知れなかつた。まつたく人人をほろりとさせない、肩身の狭い死に方である。生命の脆さを思ふより、輕蔑が先に立つ。しかし津田には一概に笑ひ切

れないものがあつた。和緒のやうにすましてはゐられない。津田は自分でも十分非人情であると構へてゐるが、この暗鬱な感じは、理不盡な自殺の事後の筈にちがひなかつた。その筈をいつたい誰が受くべきか、母か。むしろ和緒である。津田はそんな責任はもちたくなかつた。持つ意志もないのに、この弱り方は何故なのか。續だつた。

「僅か二ヶ月とでない内に、二つもお葬式を出すなんて、いくら守山が大身代でもやり切れないだらうね」と和緒である。

津田は歩いてゐ、ふと立止まる錯覺を覺える。母の頭には葬式の費用が第一に來るものらしい。これは無茶だ、と津田は、いまだしものごとくに動じ易い和緒であつてもよいではないかといふ顔を露骨にした。

三

午後二時が近づく、和緒は用もありさうにない階段を上り下りした。その聲音をつい、うるさいなと我慢しきれなくなつた時、津田はどきんとした。痛快な、殘忍な、母の氣持の透視ができた。

生憎と、守山の柩が佛式で、歩いて菩提寺へうちの前を通るのである。女親族の白無垢の一行が通るかかと、女中がそれを知らせにきた。津田は、

「門口から覗くのぢやないよ」と言つた。

和緒はもう、二階の硝子窓に身をよせてゐた。

津田は母と肩をならべて、柩を見送る氣がしなかつた。業腹である。

「まあ、ちよつとごらんよ、千杜世さんの美しいこと」

手招きをうけて、津田は咄嗟に立上つた。他愛もない。

千杜世とは守山のひとり子だつた。ひとり大きな死島田が、長い振袖の白さで濡れてゐるやうに鮮やかに見えた。彼女たちは言ひ合はせたやうに、誰ひとりこちらの二階を見上げるものになかつた。みんな一様に死の中に一切の關心を失ひ、如何にも死の悲しみに挫かれた色と動きである。たとひ馬が途中で飛び出さうと、彼女たちは深い調子を崩しさうに思へなかつた。が千杜世の眸だけが、ちらりと二階へ向けられたやうに津田は感じた。

やがて、柩が長長と町角を離れて來た。

「あの香臺をもつてゐる人が、一番上の兄さんだよ」と和緒は指をさした。

が、いつか和緒の瞳は据つてゐた。白木造りの華麗な柩が母の網膜にはいる。瞬きもしない。柩は次の瞬間窓の下を過ぎるのである。が母は、目送しようとはしなかつた。ひと所を見詰め、動かない。どれだけか經つて、遅ればせの會葬者がちらほら通るやうになつても、母は窓をはなれなかつた。この母は動搖してゐる。と流石に、それ見ろと言ひたい氣持で津田は和緒の姿を眺めやつた。

「随分譚山な人だつたね。女學校の校長先生も

ゐたよ。市會議員もゐたよ。ほんたうに近頃になく立派なお葬ひだつたこと」

さう母は言つた。そんな風にしかこの母は表現できないのだ、と母の挫かれたものが津田の眞正面に來た。そのまま顔を見合はせてゐると、母の表情が段段硬直していくやうである。窓によりかかつてゐる。どこまで硬直していくか、捨てて置いたら泣きたすかも判らない。津田は何とか言葉をかけざるを得なかつた。

「どんな氣持でした」と笑ひにした。

「立派だつたわね。あんな立派なお葬式をしてもらへる位なら、あとに心残りが無い。死んだ當人もさぞ満足してゐるだらうよ。ちよつと羨しかつたね」

如何にも羨しさうな和緒である。放鳩、花環、盛花、造花、如何にも傘問屋の旦那那の死にふさはしい譚山な會葬者である。莊重で、美麗で、仰々しく派手だつた。津田は漸く柩の中の人が守山であらうと、そんなことはこの母の感激の内容にかかはりのないことに氣がついた。和緒は多分、通りすがりの葬式にでもこれと同じ表情を見せることであらう。

「ちつとは守山を氣の毒に思はないんですか」と言へば、和緒は、

「あほらしい、二十代の娘ぢやあるまいし」と凡そ、情事に縁遠い顔をするだらう。

愛と云ふ言葉が四十代ではてれくさいなら、てれくさくとも構はない、よし愛してゐなかつたとしてもよい、が、自分のため自棄をおこし

ての自殺である、いづれ愛慾の仕業である。だとすると、そんな激しい愛慾の渦中であつて、しかも柩を見送つたいま、かう平靜に構へてゐられるなど、無茶苦茶だ。死身ぢやあるまいし、多少の感慨もあるだらうぢやないか。それにひと倍血の氣の多い母の持前としても、と考へ疊みこんで、津田は持つていきどころのない不満を感じて晝寝の姿にころがつた。

津田は自分の意見のために慍るのではない、母のために慍るのであると説明をあたへ、憤懣した。

夕餉の時。

和緒は津田以上に、いろんな食卓の小皿に箸をつけるのである。晝間の感情など、おろかなことだ。母の健啖は津田の氣を悪くした。津田は腹が空いてゐるのか、ゐないのか我乍ら判らなかつた。空いてゐるやうな氣もするが、何も食へたくない。せめてと津田は考へる。食事をいま少しひかへ目にするといふ、仰山でないやり方で、和緒の守山に對する女らしい氣の弱りを見せてほしいと思ふのである。二杯目のごはんを一つにし、その間むだ口はきかず、伏目になつて、ただ何となく弱弱しい面もちで、

「わたし、なんだかまだお腹がくちいので、そんな奥行のある母親を見せてくれたなら、津田は、——或は津田はその場合なんと慰むべきか、こまるだけか判らなかつた。

上京の前夜、津田は母と一緒に柳ヶ瀬へ出た。柳ヶ瀬は紛然と動いてゐた。
「魚藏へ行かうよ」だしぬけに和緒が言ひ出した。

「いま頃」

「なあに、若し部屋がふさがつてゐたら、ほかへ行けばいいよ。橋の上から鵜飼を見るだけでも結構だよ。とにかく空いてゐるかどうか、訊いてみようよ」

さう言つて和緒は、公衆電話の方へあともどりました。その姿を見送つてゐて突如、津田はこの數日來どんなに外からの力を加へても生じなかつた和緒の一面を偶然に發見した。

魚藏とは、五年前和緒が守山の世話をうけるといふ話のきめられた思ひ出の料亭である。顔にこそ出さないが、思ひ出を思ひ出し、うかつに魚藏と言つたのだらう。遠い記憶へふと心が滑りこんでいつたものと解して、構ふまい。さう考へて津田は微笑した。和緒は津田にとつて生みの母である。がこの母は、同時にまた何者かでなければならぬ。このとき、和緒の上にひさしぶりに新鮮な女を感じた。

だが、待てよと、津田は饒然と思ひかへずのである。この母は急に鰻がたたくたつたのかも判らない。魚藏自慢の割烹である。和緒の非人情なら、當分津田はもう澤山だつた。

津田はやがて戻つて來さうな母を、どういふ顔で迎へようかと考へた。

(昭和七年四月)

近代小説のゆきすぎ 小説といふものは、

つねに新しい發展を要望されるものである。私は先に、小説における心理描寫の大切であることをいつたが、人間の性格を内部からのみ考へ勝ちな近代小説の風潮が、また一種のゆきすぎであることもたしかである。日本には外國小説のやうに、すぐれた心理小説にはめぐまれてゐない。折角心理描寫といふ技法を習つたばかりであるが、それをマスターしないうちに、心理小説のゆきすぎといふ外國小説の弊を知らなければならぬのは不幸である。或はゆきすぎないうちに、正しい位置を教へられたことは仕合せであるといへるかも知れない。といつて、心理描寫の不必要となへるのではなく、人間をいま一度、外部のもろもろの環境の中においてとらへることが必要になつてきたといふ意味である。つまり個人的な自我を、もつと大きな自我としてみる必要が生じてきた。私たちの背後には、國家があり、社會がある。さういふ意味でも新しい小説が生まれて來なければならぬのだ。

(「小説作法」より)

贅肉

紋七は動いてゐる車内から歩廊の母の顔を簡單にひろつたが、降りと自分が母の琴を迎ひに近よつていつた。琴は元氣のない顔をしてゐたが、それでも稍稍おもてに出迎ひの人らしい色をみせた。二タ言三言で半年あまり別れてゐた母と子が半年を越え昨日今日のやうな樂な氣持を取りもとす普通の挨拶も、琴にはいかにも辛さうだつた。琴は紋七の顔を迎へたので待ちかまへてゐた自分を投げ出しにかかるのだ。相手の手のなかへはいつてしまへば、あとはどうにでもなるといつた頼り方である。これまでこんな頼り方をされたことがなかつたので、紋七はたじたととなり、母の蒼い顔から永田東作に對する母の情熱の燃えさかる勢ひをどきりと感

じた。琴はこれを十幾年續けてゐるので、もはや見榮はなく、一途なたぎりやうであつた。陸橋の階段で母の手を取り、紋七の顔は、永田に對する母の容易でない氣持が實感となり、あらはれるのを抑へかねた。のんきにかまへた額付で母の前にあらはれては機嫌をそこねるだらうと、気車ひなから風こほりさうな顔をつくつ

てきたが、おのづと琴の色に相應しい顔にこちらもなれた。

驛前になると、暮ちかい空に稻葉山が空半分は黒黒と迫つてゐた。東京に住みなれた目には岐阜驛頭の風景がものものしく映るのだ。山上の金華城は小粒だがきりりと引きしまつて見える。そのもののしさは事件の解決に岐阜へ來た、かまへた紋七の情緒によく合つた。自動車の中で母の膝をかるく叩いて、おもてに或る表情を浮かべ、

「母さんが永田と喧嘩別れしたつて云ふのは、たしか一ヶ月前ね。その後、一度も逢つたことがないつて、嘘？ こつそり逢つてゐるんぢやないかな」と訊いてみた。「逢つてない？ 一度もね。それぢや母さんの方で逢はうとしなかつたんだな」

顔いて、琴は慍つたやうな顔をした。母の強情は持前だつたが、一ヶ月も永田に逢はうとせず、人一倍血の氣の多いからだを制してきた案外な頑張りには、こいつは出来過ぎだと濁らない心でさう思つた。しかしさうとう負けになり自分を電報で呼びよせたことを考へると、はつきりとした線をもつ横顔を眺めて、ひよいと老人のやうな微笑をうかべるのである。何もかも見透しが出来てゐたのだと云つた風な……

そしてさういふ見透しにしたがひ紋七は今度の場合も、母と永田東作が和解してくれることを望んでゐた。そのために東京からの汽車だつた。

瓜實顔でふくみ綿をしてゐるやうな下つぷくれて、眸が大きく、小柄なせゐるか琴は三十をわづか越えた風にしか見えなかつた。姉のやうである。笑ふと深いゑくぼが出来、知らないひとは板の間をふんできた人柄に見立てた。十餘年琴はまるで生活に複雑をもとめるやうに極く些細なことで永田東作と争ひをしたり、すぐ和解してみたり、別れてしまふんだと周囲のものに火をつけたり、逆上して家をとび出すまではいいが後から追ひかけてくる永田を途中で待つてゐるなどと、さまりの悪いことを平氣でやつてのける性質故、年齢の色が年相應に顔やからだを處理しかねるやうであつた。

琴と紋七はある事情から、永年生活が別個になつてゐたが、紋七はときどき自分のかけに琴のやうな生活者のゐることで、ある場合には何か元氣の湧く思ひがあつた。

數年前、紋七が永田東作に初對面したとき、母と子の位置が倒錯した光景があつた。紋七は「――教育もない、萬事ゆききとかぬ女ですが」と琴をそばに置いてさう云つた。「すでにお聞きおよびのことと思ひますが、この母は若いころから苦勞づくめで、家庭的にはすこしも恵まれず、そのため家出までしてゐるくらゐです。言葉では云ひきれない辛い目をみてきた可哀さうな女なのです……」

昂ぶつた心持を顔にあらはして、今後は一切

と頼んだ。そのとき琴も一しよに頭をさげたが、すでに八年間永田の世話をしてゐた。

あとで二人になると、大變うまい挨拶だつたと母に褒められ、紋七は臆病さうに笑つた。がその笑ひは母の顔色に迎合しようとするために、自分を欺いてゐる風でもあつた。

金華山に向いた金神社の裏手に、琴の住みなれた二階家があつた。静かな邸小路、時をきめて賑やかなる近くの小學校、芭蕉の葉と絲杉の卷きあがつた葉のあひだに神殿の白木造りが仄見えた。えにしろ、藤のうゑ込みになつた中庭があり、庭に面した部屋はひろりがきられ、ほとんど一日ここにゐた。冬のあひだは部屋の半分日向になり、日が翳ると、ひろりの顔色もかはつた。琴の裏千家は玄人の域にあつた。いまでもなほ頼まれて四五人の娘に教へてゐるが、琴は娘たちに向いてゐるといつか友達になつてしまふのだ。陽氣な性質を誰に對してもまる出しなので、娘たちもこの茶の湯の師匠にはすぐ慣れた。そんな娘たちのなかで琴はぐんぐん若く還つていくやうに見えた。その顔に漂ふ若やいだ明暗は借りものでなく、身についた感じが、——だから永田東作が心をつくす贅澤なくらゐな衣食住にも、あまり深い心の状態で感謝してゐないやうであつた。

紋七は母のもとにあるあひだ、日に一度ひろりの前に坐らせられる。そのときの琴は我儘と贅澤になれた女でなく、興行があり厳としてゐて、ひとりでに畏敬させた。そんな一面が嘘の

やうに身に備つてゐるが、さて朱塗の長烟管をくはへ心持ち膝をくづした姿勢になると、別人に見えるのだつた。琴の喫煙は紋七の幼い記憶からつづいてゐる。實際この母は平常なものでもないで烟管をくはへ、贅肉をつけていくのが一番よく似合つてゐるやうである。その傾向は最近に甚しく、ますます木偶の棒になつていくと思はれた。——茶の湯で琴に獨立を強ひる、それは出来ることであつたが、はたしてそれにどれだけの値うちのあるものが、紋七はその効果を疑ふのだ。琴はいま十代の娘のやうに永田東作でいつばいになつてゐる。四十二年のあらゆる季節のなかで一番似合ふ季節にある琴を、わざわざ過ごしにくい季節に落としてしまふなど、不見識な限りであらう。さやうに紋七は己の心を寛大に持つてゐた。

最近琴に縁談がおこつた。相手は多額納税者の六十の隠居で、琴は茶の會で二三度あつてゐる。求婚される話は珍しくなく、三十代より四十になつてから度たびもち込まれた。今度も琴は一笑に附し、永田にも話さなかつたが、永田はよそで聞いてくると、自分にかくし立てしてゐるだけ琴の心が動いてゐるものと解し、責めた。この求婚はもし隠居が死ねば、隠居家屋と二萬圓をあたへるといふのである。永田の五十男の情熱がその條件に氣後れさせ、琴とのあひだに溝を作つた。それが琴の心をめちやめちやにして、相手のひと捻り二タ捻り裏返つた心情を琴はそのままの冷淡と見なして、喧嘩別れを

した。

容貌の點から云ふと、紋七は琴とよく似てゐたが、精神的には類似するものがなく對蹠的と云つていくくらゐだつた。しかし、紋七の弱點は、母に向へばいかなる場合にも自分を味方であるやうに見せかけずにはゐられなく、意識無意識にかかはらず母の意に迎合しようとすることである。——酒は富久娘、半年ぶりの母のお酌で紋七はだまつて話をきいてゐた。食卓には若鮎のきのめ和へがあつた。

「一ヶ月前の晩、母さんはあの人の誤解をとくためにたうとう泣いてしまつたんだよ」

話ははじめから眞剣な状態で聞きなされた。紋七は見まもり、母のこもこも抱く感情をいつさい汲みとつた上といふ顔をしてゐた。

「今度の縁談に母さんがだまつてゐたのはわるかつた。でも、母さんは二萬圓も家作も相手にしなかつた氣持を汲んでもらひたかつたんだよ。それを永田は、自分のことばかり喋つて、やれうちの商賣が近ごろ思はしくいかないので母さんに不自由させて置いたのがわるかつたとか、永田の奥さんが亡くなつたときいくら入籍をすすめられても母さんが應じなかつたのはこんなことの下心だつたとか、むちやくちや云つて、ちつとも母さんの云ひ分は聞いてくれないんだよ。そんな法つてないよ。入籍のことも、何故斷つたか、あの人はよく承知してゐるんぢやないか……」

永田はこの不景氣に家作と二萬圓は夢のやうな話故、ことわる女は馬鹿か氣狂ひだ、是非承諾するやうにと皮肉な顔でくどき立てたといふ。そのやうすがいかにもこの際琴と手を切りたいと望んでゐるかのやうに見えたのだ。さう云つてふくらの厚い髷をま上に、ぼんの凹を見せ顔を伏せるのだつた。その目頭はすでにぬれてゐるやうであつた。しかし、紋七が母を前にしてかうじりじりと不安をつのらせていくのは、一ヶ月のあひだ琴がひとりで苦しんできた分量をいつべんに受けとらうとして、受けとめかねるせゐのやうであつた。

「場合によつてはこの際ひと思ひに別れてやうかとも思つてゐるんだよ。自分ひとりのくらしなら、なに、目鼻はつくんだからね」

紋七は意味のない目を合はすのである。口を吐いて出る慰めの言葉はどれもみんな琴の眞剣なことさう狭められてゐる氣持にはいつていかぬやうに思はれ、また母の悲痛に近づくため出来るだけ悲しみを装はうとしてみるのだが、自分の目のとどく範圍より母のそれが遙かに深いので、何か手持ち無沙汰で、だまつてゐる。だまつて盃のふちを舐めてゐる。琴は盃を置く、と薄い唇に烟管をくはへて考へこみ、口のなかでかちかちと金屬性の音を立てるのである。濃い眉と小さな口許に或る氣性をみせて、それで保つてゐるだけに、痛痛しい思ひを誘はれ、その壓迫にたへられない氣が紋七はした。

昔の紋七は母と別れてゐたあひだが長いので、

親狎れもうすく、かうした場合を非人情に眺めてきたが、いまは琴と一しよに波に乗り、波をくぐるのだつた。そしてこのどきどきする氣持は、やがて相手の心のなかへしつくりと溶けこんでいけるよすがのやうに思はれた。

「母さんは、紋七、今年で四十二になつたよ。ほんたう云へば、もうあの人と別れられなくなつてゐる。別れるのなら五六十年昔だつた。いま別れては、母さんのからだが不憫だよ」

母の心もこまできてゐるのかと、紋七は暗い庭のうゑ込み目をやつた。この衰へも年齢のせゐかと、琴のうちにひそみ聞へてゐるものがまつ直ぐこちらへ響いてくるのだ。紋七はスクオイの電報をうけてゐるとき、またかと、琴が永田東作を焦らしてゐるやうすを描き、それを東京から持つてきたくらゐである。一ヶ月前、永田と仲たがひした由報告されてゐたが、どうにも手のつけやうがなくなつて置いてゐた。その後二通あつたが、永田と別れてゐることがだんだん耐へがなくなつていくといふ文面でなく、普通であつた。電報をみたときも、たえず勝氣のついでまはる性分の母がことさら紋七を利用するほど弱氣になつてゐるとは考へられなかつた。しかし、母の二三通の手紙がいかに女らしく、いかにも優しく、困つてゐるらしく、何とかして紋七を自分と永田東作の和解に利用しようとなくらんでゐるやうな種類であつたなら、或は紋七の氣持がすらすらとりの出すことが出来たかも知れない。が、母ひとりで一ヶ月も苦しん

できたといふことは、まるで紋七の焦謀の分まで代償してゐたかのやうにも考へられ、——いや、これは嘘だ、萬一そんな母を見せつけられのなら、紋七はますます困るだけかも知判らないのだ。

琴の強い氣性には、こんな例がある。

父親の云ひつけで結婚した紋七は、上京の途中琴のゐる岐阜へ細君を挨拶につれていつた。

出迎へた琴は一存で、長良川にちかい旅館へ案内した。

「母さんの家へ行きたかつたのだ」と母を廊下へ呼び出して、それを云ふと、

「厭なことだよ」

「見榮や遠慮なら、母さん、止した方がいいよ。母さんがいまだどんな生活をしてゐるか、あれにはもう何もかも話してあるんだから」

「それぢやなほさら厭だよ」

いづれ琴が老年になれば引きとらねばならず、いまから妻と琴のあひだに溝を作るのを怖れてすこしでも雙方を馴染ませて置かうと、是非琴の家で泊つてみたいと紋七はせがむのだつた。それがあまり執拗かつたのだらう、顔色を變へて琴はそのまま歸りかけた。

「母さん」と聲を抑へて追ひかけると、

「もういい」

長い廊下を歩き歩き向うを向いたまま、母は首を振つた。そして長廊下を一度もふりかへらず歸つていつた。母の自分本位な行動は他人のそれだと、まだ良人になじみかねてゐる細君の